

# 三訂・片山広子年譜

藤 田 福 夫

筆者は先に拙著「近代歌人の研究」(東京笠間書院刊。昭五八・三)に「竹柏園の二閨秀」の項で片山広子の歌風概観とその二歌集に触れ、その項の末尾に「片山広子年譜」を掲載した。その年譜は最初「金沢大学語学文学研究」第六号(昭五〇・一〇)に掲載されたものに相当数の項目の補遺を加えたものであった。然るに拙著刊行後「昭和六十年十二月」ご熱心な広子研究家たる、大阪、高槻市の門川正男氏から年譜未掲載の広子作品について、ご架蔵の雑誌類により十数項目のご教示をいただいた。筆者の手もとにおいても引つづき、資料を求めて来たが、ご教示のすべてに当たることが出来たわけではない。ここにそのご教示にしたがって旧年譜に補足、修正を加え、一先ず発表することにした。なお不十分な点が残るかも知れないが、改めて全年譜に補足、修正部分を加えたものを一先ず発表し、拙著の欠を補うことにした。

門川正男氏のご厚意に心から謝意を表する次第である。なお筆者は雑誌「短歌研究」昭和六十三年二月号「往時の人気作家たち」の「近代・現代」の項に「新に注目されている、片山広子」を執筆したことを付言しておく。

片山広子年譜

年次（西暦）	年齢	生 活 事 項	文 学 活 動	関 連 事 項
明治二一 （一九七八）	〇	二月一〇日東京麻布三河台に生まれた。埼玉県大里郡奈良村四方寺の人、吉田二郎長女。後、妹次子、弟精一、東作が生まれた。父はニューヨーク領事などを勤めた、外交官である。	（作品に発表誌名の無いものは「心の花」である。また署名は松村みね子名儀のもののみを記した。）	
一八一二八 （一八八五 ～九五）	七～七	この頃東京麻生鳥居坂の東洋英和女学校に在学。何年かから寄宿舎生活を送ったらしい。予科三年、本科五年、高校科二年の課程を進んだが、二八年同校の卒業生名簿には広子の卒業年次記載無く、ただ初期と記されている。		
二九 （二八九六）	一八	新見かよ子とともに佐佐木信綱を訪ねた。歌を学び、源氏物語の講義を聞いた。（私が一九… …注、数え年……の時先生のお宅に入門して……」むかしの人による）		一〇月「いささ川」創刊。（第七号に至る）
		四月「いささ川」第四号の「歌		

三〇 (二八九七)	一九	学会歌題欄」に次の一首がある。 名所花 わたし守舟こぎと めて眺むめり角田の川のは なの夕ぐれ 五月「いささ川」第五号「言葉 の園欄」の次に一首がある。 春の歌の中にやつ橋のむか しもかくや匂ひけんあはれ もふかき杜若かな 六月「昔物がたり」(雅文)(いさ さ川・第六号)	二月「こころの華」創刊号課題文「新 年望嶽(坂正臣選)に天位入選。また 学園欄「雪中鶯」(信綱選)に次の歌が ある。春たてばなほふる雪のさむけれ ば花まちがほに鶯のなく 三月「一日の家とじ」(雅文) 四月「詞海欄」に 白浪のよする渚の蟹の子も春のも のとて磯菜つむらし 同号学園欄に無題の文(秀吉について 論じたもの)がある。 五月「築地居留地」にゆきて(雅文) 「時鳥をきく」(坂正臣選、地位)
三一 (二八九八)	二〇	この頃東京麹町区、永田町二丁 目に住んだ。	

<p>(一九〇〇) 三三</p>	<p>明三二 (一八九九)</p>	
<p>二三</p>	<p>二二</p>	
<p>この頃東京駒込千駄木町五七番地に居住。 (注、この家は先に森鷗外が、後三十六年二月以降夏目漱石が居住した家。現在明治村に保存。山田総子氏教示による。)</p> <p>六月三日、長男達吉が生まれた。</p>	<p>四月六日、日本橋俱樂部における竹柏園大会に参会。五月以降夏新潟県人片山貞次郎と結婚。この頃貞次郎は大蔵省勤務。 (父と結婚いたしましたのは母が二十二……数え……の夏の由でございます。……山田総子氏来信)</p>	
<p>八月、新体詩「川にのぞみて」あかき貝(署名片山広子) 一一月「長き一日、上」(雅文) (注、これは信綱、千亦らと立川へ吟行した紀行文である。)</p>	<p>五月「竹柏園の記、上」 六月「竹柏園の記、下」 (これまでの署名は吉田広子または吉田ひろ子)</p>	<p>六月「船」(正臣選入選) 七月「漂流の人」(雅文) 八月「古寺」(雅文)「樹蔭読書」(雅文) (正臣選、地位) 九月「文苑」中に一首 雪しのぐ大木ともなれねざしきへ なみなみならぬまつの緑子 同、詞海欄に「日記のうち」(雅文) 学園欄に「筆」(縦の舍選、天位)</p>
	<p>注、夫、片山貞次郎の原籍地は新潟県蒲原郡早通村(現亀田町)大字茅野山である。 明治四年一月一日四日生。 同二九年、法科大学卒。</p>	

(一九〇三) 三六	(一九〇二) 三五	明三四 (一九〇一)
二五	二四	二三
<p>九月六日、夫の父恭平死去。</p> <p>三月以前(?) 駒込千駄木町から鎌倉長谷観音前に移る。(千駄木から鎌倉へすぐ移ったかどうか不明。鎌倉居住は夫の病氣療養のためである。) 注、今の浅羽屋といううなぎ屋が現在の向かうの位置にあり、その隣の</p>		
<p>一月「月の夜」(雅文)</p> <p>二月「竹柏園集、第一編」に雅文二一篇、収載。題二つの道、いしばし、我樂しび、冬の夜がたり、七人の友、神の家、一日の家刀自、雪の日、故郷、第一竹柏会記、研究会。(小説的構想の文もまじっている。)</p> <p>短歌「つゆくさ」(一二首)</p> <p>二月「自然の美」(訳文・ミラー)</p> <p>同「長き一日、中」</p> <p>三月「長き一日、下」</p> <p>四月「女学士」(雅文小説)</p> <p>七月「遠き国なる友の許に送る文」</p> <p>五月「竹柏園集、第二編」に雅文六篇収載。題、女学士、遠き国なる友の許に、御墓もうで、小ぎれ箱、かへり道、まらうどの国。</p> <p>一月竹柏園歌会(明三五・一二) 兼題「雲」は一首。</p> <p>三月「そなれ松」(雅文)</p>		

		<p>家であった由。(総子氏来信) また「あけぼの」に次の広子の歌があり、鎌倉居住はこの頃以後三年間はどであったと思われる。(三とせ我かり居住せし長谷寺のみ山のかげの草の家おもふ)</p>		
<p>明三七 (一九〇四)</p>	<p>二六</p>		<p>三月「あずま」(雅文) 四月「野みち山みち」七首 五月「わか葉の頃」(雅文) 七月「さきの世」七首 八月「つちけぶり」(雅文) 一〇月「つちけぶり」(雅文) 一二月「秋の日」(雅文)</p>	<p>注、「秋の日」文末に「十月終りの日鎌倉にて」とある。この頃鎌倉居住が明らかである。</p>
<p>三八 (一九〇五)</p>	<p>二七</p>	<p>四月二〇日、夫日本銀行調査役となる。</p>	<p>一月「にひあめつち」一六首 三月「深山木」一〇首 七月「ふきの若葉」九首</p>	
<p>三九 (一九〇六)</p>	<p>二八</p>		<p>一月「天つ国」二二首 五月「くぬぎ原」三三首 六月「折々草。―靈草物語・わか葉―」(雅文) 九月「うき秋」一六首</p>	<p>「心の花」八月号に「歌集」あけぼの」を読む…松本信夫」掲載。 同文中「片山女史の歌は調想と相叶った渾然たる美しき芸</p>

(二九〇七) 明四〇	二九		一月「朝空」五〇首 一月「八日月」二〇首 三月「四つの袖」四七首（巻頭掲載） 四月「若樫」三〇首 一月「霜月日記」（雅文）	
(二九〇八) 四一	三〇		一月「広野」二五首 四月「玉琴」に一〇〇首収載 七月「野の花」九首	四月二五日付東京朝日新聞の「玉琴」批評文中に「片山女史の佳調多きは集中異彩を放てり」とある。
(二九〇九) 四二	三一	五月一四日、日本橋倶楽部における竹柏園第一三回大会に参加。	一月「新年付録」に「春がすみ」三四首 四月「夕空」一四首 八月「照子の君を悼み参らせて」 「追悼雅文」ほか一首 九月「さめたる眼」二五首 一〇月「見果てぬ夢」二三首	
(二九一〇) 四三	三二	春、新井宿三丁目一三五二に移る。	一月「いつはりごと」四七首 三月「胸の灯」三三首 六月「花かげ」五八首（七月に花かげ正誤） 「蜜蜂」三六首 二月「大塚楠緒子女史を想ふ」七首 一月「十一年」（小品文） ——口語体による——	

<p>明四四 (一九一一)</p>	<p>三三</p>	<p>五月「二重心」三三首 六月「郊外より」一二首 九月「我」二六首 十一月「風の日」(叙景的文章) 楠緒子の一周忌に寄せた歌二首</p>	
<p>四五 (大正・元) (一九一二)</p>	<p>三四</p>	<p>一月「潜める者」五六首 八月「わざおぎ」二六首 一〇月「夢」二六首</p>	
<p>大正二 (一九一三)</p>	<p>三五</p>	<p>一月「付録」に「白鳥」一〇〇首 三月「草団子」(小説) 松村みね子 五月「けやきの村」一〇〇首 七月「奥さんの日記」(少数の歌を含む) 松村みね子 八月「奥さんの日記」松村みね子 一〇月「いちぢく」松村みね子 (注、思い出の形の小説)</p>	<p>三月、柳川(芥川) 龍之介の「薔薇」二二首 四月、龍之介の「大川の水」 五月、龍之介の「紫天鵝絨」一二首 九月、龍之介の「客中恋」 一〇月、龍之介の「若人」(旋頭歌) 一二首、それぞれ「心</p>
<p>三 (一九一四)</p>	<p>三六</p>	<p>一月、婦人研究会に橘糸重子、石樽千亦らと出席。 一月「満月」(レディー・グレゴリー) 松村みね子 二月「海賊の舟」六八首 四月「わが命」五四首 五、六、七、八月「暗の精・松の精」(ペインの印度古詩) 松村みね子 九月「夢使」五一首 一〇月「タゴールの詩」(詩集園守より)</p>	



		大四 (一九一五)			
		三七			

<p>(一九一七) 六</p>	<p>(一九一六) 大五</p>
<p>三九</p>	<p>三八</p>
	<p>ランド文学に親しみ…」とある。</p>
<p>一月「星」一二首 同「アンドロクロスと獅子」(シヨ) 松村みね子 二月「火の後に」ほか六篇(ダンセン)</p>	<p>信綱。三〇〇首。一五一ページ。 六月「心の花」(翡翠)批評号、谷本富 ほか二名。 同「偶像破壊の日」松村みね子 七月「白楊」(注、白岩艶子歌集) 評に 加わる。 八月「アルギメネス王」(ダンセン) 松村みね子 同「人馬のにひ妻」(三田文学) 松村みね子 九月「大うそつきトニーカイトの恋」 (ハアデイ) 松村みね子 同「うすあかりの中の老人」(イエツ) (三田文学) 松村みね子 十一月「櫛」(随想五篇より成る。歌を 含む) 同「藤むすめ」(注、松村はつ子歌集) 評に加わる。 十二月「進んでいく刺戟」 (注、新井洗の「微明」評に加わる)</p>
<p>二月「英語青年」(三六ノ一〇) の「片々録」中に蘭秀英文学 者、片山広子のアイルランド 文学翻訳の労作を紹介。</p>	

<p>(一九一九) 八</p>	<p>(一九一八) 大七</p>	
<p>四一</p>	<p>四〇</p>	
<p>一月「茶色の犬」一二首 五月「白蓮さんの歌集」(歌集評) 六月「最初のペイジ」(小説) 八月「けふの物思ひ」一七首 九月「女王の敵」(ダンセニ) 同「軽井沢にて」一六首 (三田文学) (短歌雑誌。二ノ二二)</p>	<p>一月「山の神々」(ダンセニ) 四月「やみぬれば」一二首 五月「伎芸天」(注、川田順の歌集)の批評に加わる。 八月「客室に座して」 松村みね子</p>	<p>一(三田文学) 松村みね子 六月「いたずらもの」(シンク) 刊。 刊行者岡田三鈴。松村みね子 一〇月「ユダヤにおけるクレオパトラ」(シモンズ) 松村みね子</p>
	<p>二月、広子よりの病氣見舞に 対する芥川龍之介の謝礼書簡 あり。 (二月二八日付)</p>	<p>七月「心の花」は「いたずら もの」批評号刊行。 十一月、市河三喜が「英語青 年」(三八ノ四)に「松村みね 子訳『いたずらもの』を読む」 を掲載。二、三の誤訳を指摘 した。この頃菊地寛が時事新 報記者として広子を訪ねた。</p>

<p>大九 (一九二〇)</p>	<p>四二</p>	<p>三、一四夫片山貞次郎死去。 七、八月を御殿場で過ごした。</p>	<p>七月「生死」一二首 九月「御殿場より」(随想的通信文) 同「ある老人の話」(随想) (霸王樹・二ノ二) 一〇月七日「秋の家」(九首) 時事新報 十一月「貴婦人」(エミイロウエルの詩 四篇) 松村みね子 十二月「秋草の野に出でて」一二首</p>	
<p>一〇 (一九二一)</p>	<p>四三</p>	<p>三月、長男達吉 第一高等学校 英法科を卒業。</p>	<p>一月「一年の夢」(シャアブ) 五月「静かなる月日」一二首 十一月「ダンセニイ戯曲全集」(警醒社 書店) 刊。序 James, N. H. Cousins 英文による。菊池寛。跋著者。内容山 の神々・アルギメネス王・光の門・ア ラビア人の天幕・神々の笑ひ・おき忘 れた帽子・金文字の宣告・旅館の一夜 ・女王の敵。 同「とり入れ」黄ろい小路」(Joseph C ambell) (詩聖・第二号)</p>	
			<p>一月「或る日のこと」一二首 二月「かや山のうへ」一二首 四月「三枝子さまに」一二首 同「馬鹿もの」(訳詩) (Padraic Pearse (詩聖七号)</p>	

(一九二四) 一三	(一九二三) 一二	(一九二二) 大一一
四六	四五	四四
<p>八月、軽井沢「つるや」に滞在。 「……けふ片山さんと『つるや』 主人と追分へ行った……」(八、 一九付芥川龍之介書翰、室生犀</p>	<p>九月一日、東京駅前広場にて大 震災にあう。</p>	
<p>二月「返代劇大系」(同刊行会) 第九卷 に西の人氣者(シング)山の神々(ダ</p>	<p>一月「アドルフ」(ローレンス) 松村みね子 四月「ロドリゲスの記録」(ダンセニー) 松村みね子 この年「シング戯曲全集」(新潮社) 刊。 「海に行く騎者聖」聖者の泉「谷間の 蔭」西の人氣者」収載。 一月「麦の奇跡」(バトリック、コラム) 松村みね子</p>	<p>六月「カルバリー」(イエツ) (劇と評論・第一号) 同「愛蘭戯曲集」(玄文社) 刊 内容・モリスハット……マアレイ ウスナの家……マクラオド 寛大な恋人……アーヴキン 詩人……ピアス 谷のかけ……シング 満月……グレゴリー 欲求の国……イエーッ 七月「むかしの人」(注、大塚楠緒子の 思い出) 一〇月「軽井沢にありて」一一首</p>
<p>一月十日より一三日まで、み ね子訳「西の人氣者」新劇協 会により上演。 (仙台市、仙台座)</p>	<p>一二月二一日より二三日まで、 みね子訳「西の人氣者」新劇 協会により上演。 場所、東京渋谷道玄坂、九頭 竜女学校講堂。</p>	



<p>(一九三二) 六</p> <p>五三</p>	<p>(一九三〇) 五</p> <p>五二</p>	<p>(一九二九) 四</p> <p>五一</p>	<p>(一九二四) 昭三</p> <p>五〇</p>
<p>四月「春」(山下陸奥) 出版記念会(新橋東洋軒)に参会した。          一二月、長野県軽井沢町大字軽井沢、高瀬(通称愛宕下)に別荘を買いとめた。</p>			
<p>九月「現代短歌全集」(改造社) 第一九卷に「片山広子集」(共篇) 収載。</p>	<p>「運命の人」(シヨ) 収載。          松村みね子          また同書はさこみ付録に「アンドロクロスと運命の人」を執筆。</p>	<p>九月、現代日本文学全集(改造社) 第三八卷、現代短歌集に一六首収載。</p>	<p>(新潮社) に「プレイボーイ」(シンク) 「海に行く騎者」(シンク) 収載。          松村みね子          同「世界戯曲集・愛蘭劇集」(同刊行会) 「海に行く騎者」(谷の影) 「西の人気者」(以上シンク) 「山の神々」 「光の門」(以上ダンセニ) 収載</p>
	<p>一一月、堀辰雄が広子の長女総子、辰雄などをモデルとした「聖家族」を「改造」に発表。</p>	<p>一〇月、長男達吉、吉村鉄太郎のペンネームにて、長女総子、宗瑛のペンネームにて雑誌「文学」の同人となる。</p>	

	昭七 (一九三二)	五四	(前所有米人宣教師ウイン) 六月五日、佐佐木信綱還暦記念 会(麴町三年町華族会館)に参 会。	一月「猫」(短歌研究) 九首	
(一九三三) 八	五五	七月二五日五島茂夫妻歓迎会 (レストランツクバ)に参会	二月「桃畑」(短歌研究) 九首 二月「静かなる美しさ」(藤瀬秀子の 歌集「楓の葉葉」の評。短文にてはが きの模様)		
(一九三四) 九	五六	二月、刀禰館正雄の歌集「旅」 出版記念(交詢社)に参会。	四月「旅」(刀禰館正雄)の批評文を「心 の花」に寄せた。この頃に歌に帰する 意図が見えはじめる。		
(一九三五) 一〇	五七		四月「心の花」課題選者名に広子の名 が見える。		
(一九三六) 一一	五八		三月「水の江瀧子」(短歌研究) 八首 九月「高雅の心をつつむ集」 (山口由幾子の歌集「紫苑」)に対する 評) 一〇月「庭のうた」 六首 十一月「鎌倉郡本郷村を過ぎ横浜にゆ ける日」 六首 十二月「鎌倉馬場谷」(短歌研究) 七首 十二月「軽井沢金の沢村櫓」 五首 一月「柿畑」 八首 二月「沼袋百観音」 八首		

六月一三日、佐佐木信綱文化勲  
章祝賀会(芝、三縁亭)に参会



<p>(一九三七) 一二</p>	<p>五九</p>	<p>三月「冬」(短歌研究) 七首 五月「横浜にて」九首 十一月「猫」八首 一二我「煙草」——友田恭助氏の戦死を き、て——八首</p>	
<p>(一九三八) 一三</p>	<p>六〇</p>	<p>夏、軽井沢に滞在中、堀辰雄夫妻をその仮住居に訪うた。  一月「老人」——ふたたび本郷村を過ぎ て」六首 二月「新万葉集」(改造社) に三〇首収 載。 三月「金の十字架」八首 五月「道路」六首 七月「市街」四首 一〇月「千束」一〇首 二月「母」五首(短歌研究) 三月「二月」一〇首 四月「土曜日」九首 五月「池」五首(短歌研究) 同「庭」九首 七月「歌」一二首 八月「大崎辺にて」三首 一〇月「八月」九首 二月「鶴鶴」六首(「鶯」創刊号) 三月「帰還」五首 五月「椿」七首(鶯一ノ四)</p>	
<p>(一九三九) 一四</p>	<p>六一</p>	<p>五月、母死去、 八月、軽井沢滞在中の佐佐木信綱、広子をその家に訪う。 東洋英和学校以来の友新見かよ子も来訪中であつた。(心の花・片山広子追悼号)</p>	
<p>(一九四〇) 昭一五</p>	<p>六二</p>	<p>五月、母の一周忌を営んだ。</p>	

	<p>昭一六 (一九四一)</p>	<p>一七 (一九四二)</p>
	<p>六三</p>	<p>六四</p>
<p>五月(?) 杵富照子歌集 「月鳳里の会」に参会。 一〇月、仙台に息女夫妻を訪ねた。 一一月二日、森敬三歓迎会に参会。</p>		<p>一〇、仙台に至る。 この年大日本歌人協会の評議員に推された。</p>
<p>九月「無題」六首(鶯一ノ八) 一二月「菊」(短歌研究) 五首 一月「厚木へ」一二首 同「近事」一〇首(短歌研究) 同「無題」八首(鶯、二ノ二) 二月「無題」八首(林語堂の長篇北京好日)(鶯、二ノ二) 五月「つばみ」四首 同「無題」一〇首(鶯、二ノ五) 同「心に深くしみた歌」(藤田富子「ゆふ汐」評) 七月「おもひいづる」八首 九月「おもひいづる」八首(鶯、二ノ九) 一二月「窓」五首(短歌研究) 一月「胡桃」五首 同「無題」九首(鶯、三ノ二) 三月「みそぎ」(日本短歌) 六首 七月「荻窪にて、一なき与謝野晶子夫人のみまへに」八首 九月「幸福」五首(短歌研究) 同「無題」八首(鶯、三ノ九) 一二月「秋」七首</p>		<p>四月、仙台に至る。 三月「霜と雪」七首</p>
<p>夏、息女山田総子、夫秀三とともに仙台に転任。秀三は仙台鉱山監督局長であった。後内閣東北局長となる。</p>		

(二九四七) 昭三二	六八	(二九四六) 二二	六五	(二九四三) 昭一八
六九		六七	六六	一九 (二九四四)
		三月二十四日長男達吉死去。 六月中旬軽井沢に行き、同地で 終戦を迎えた。	六月、東京杉並区浜田山（下高 井戸四ノ九六五）に家を求めて 転居。木村和一（和染家）の紹 介による。広子はこの頃木村に 和染を習った。	六月、東京杉並区浜田山（下高 井戸四ノ九六五）に家を求めて 転居。木村和一（和染家）の紹 介による。広子はこの頃木村に 和染を習った。
		四月「心の花」(二、三、四月合併号) 「浜田山に移り住みて後」三首 「疎開の家」(短歌研究) 九首 一月「いちち」五首 二月「明日」五首 三月「焼野」五首 五月「蛇」五首 八月「古き家」五首 九月「ジープ」六首 十一月「わが手」五首 十二月「歌集『好文木』に就いて」 (注、「好文木」は富岡とし子の著)	四月「心の花」(二、三、四月合併号) 「浜田山に移り住みて後」三首 「疎開の家」(短歌研究) 九首 一月「いちち」五首 二月「明日」五首 三月「焼野」五首 五月「蛇」五首 八月「古き家」五首 九月「ジープ」六首 十一月「わが手」五首 十二月「歌集『好文木』に就いて」 (注、「好文木」は富岡とし子の著)	「信濃小瀬——大河内国子夫人を 憶ひて」七首 五月「小田急沿線にて」四首 十二月「栗」八首 十一月「星ぞら」四首
		この年、広子の弟吉田東作死 去。		
		広子の妹、上田次子この年 (?) 死去。 (前年の「蛇」五首中に信濃		

<p>(二九四八) 二三</p>	<p>七〇</p>	<p>六月六日東京丸の内保健協会講堂における佐佐木信綱喜寿祝賀記念会に参会。</p>	<p>一月「一つの星」八首 六月「饗宴」一二首（短歌研究） 九月「お声そのままだに」（信綱の自選歌集の評） 同「乾あらず」（随筆（暮しの手帖） 一〇月「心の花」六〇〇号記念歌集、生活歌の部に「街の湯」六首収載。 一二月「芙蓉を讀みて」 （注、「芙蓉」は白岩艶子の歌集） 九月「東京通信」（婦人朝日） 一二月「九、一〇号から」 （注、「心の花」前号作品評） 同「りんご」八首（女人短歌、2） 一月「いちごの花・松山の話」 九月「花屋の窓」（随想） （女人短歌、5） 四月「春の色」一二首（短歌研究） 七月「をんどり」一二首 （短歌研究） 九月「伊井文子さんの浄命について」 一月「幻影の盾」現代語訳 （婦人朝日） 四月「現代短歌大系、第二卷」（河出書</p>	<p>町の病院に見舞う歌がある。</p>
<p>(二九四九) 二四</p>	<p>七一</p>			
<p>(二九五〇) 二五</p>	<p>七二</p>			
<p>(二九五二) 二六</p>	<p>七三</p>	<p>一〇月一二、東京茗溪会館における竹柏園大会に参会。</p>		

<p>昭二七 (一九五二)</p>	<p>七四</p>		<p>房)に「翡翠」抄収載。 一〇月、岩波少年文庫「カッパのクー」(オケリー他。アイルランド伝説集)刊。 十一月「光とかげ」(注、藤田富子歌集「曼荼羅」評) 十二月「秋の歌五首選」 (注、作品評)</p>	
<p>二八 (一九五三)</p>	<p>七五</p>	<p>「二月「心の花」の巻末の「野に住みて」刊行の辞(栗原潔子)の中に「……夫人は今春以来健康がすぐれず……」とある、推選のことは、室生犀星、北見志保子が買っている。</p>	<p>六月「燈火節」(隨筆集)(くらしの手帖社)刊。 同 角川文庫に「鷹の井戸、カスリイン・フウリハン、心のゆくところ」(イヅツ)収載。 松村みね子</p>	
<p>二九 (一九五四)</p>	<p>七六</p>		<p>一月、歌集「野に住みて」(第二書房)刊。(注、刊行者代表の栗原潔子は「心の花」同人。) 同「古き歌十首」一〇首「短歌研究」春「野に住みて」がこの年の芸術院賞候補になった。 七月「燈火節」に対し、第三回エッセイストクラブ賞がおくられた。</p>	<p>一〇月「心の花」に「野に住みて」を讀みて(久松潜一)</p>
<p>三〇 (一九五五)</p>	<p>七七</p>	<p>四月二二日、軽井沢の家を太田黒鈴子(太田黒元雄息女)に譲渡。</p>		
<p>三一 (一九五六)</p>	<p>七八</p>	<p>脳溢血により病臥</p>	<p>九月、角川文庫「海に行く騎者、西の人氣者」刊。 松村みね子</p>	

<p>(一九五七) 三二</p>	<p>七九</p>	<p>三月一九日午後八時四五分、死去。 同二二日告別式(自宅)</p>	<p>三月二三日「読売新聞」の読書随想に「松村みね子さん」(福原麟太郎)掲載。 五月「心の花」片山広子追悼号特集。 執筆者佐佐木信綱ほか三四名。</p>	<p>一月「心の花」七〇〇号記念号に「片山広子の人と歌」(栗原潔子)掲載</p>
<p>(一九五八) 三三</p>	<p>没後</p>	<p>三月二八日付で広子旧蔵の洋書一六六冊が松村みね子名義で日本女子大学に寄贈された。</p>	<p>九月「短歌」(角川書店)に未発表作品「砂漠」(二七〇首)(解説中野菊夫)掲載。 ただしこの一八〇首は全部が未発表というわけではない。中野氏指摘のように「野に住みて」におさめられたものもあり、それ以外にすでに「心の花」に発表されたものも含んでいる。</p>	